慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『芥舟学画編』套印書版零片考
Sub Title	Study on three fractional woodblocks of a xylographic multicolor edition of Jiezhou xuehua bian (芥舟学画編)
Author	陳, 正宏(Chen, Zhenghong)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2008
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.43 (2008.) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『芥舟学画編』套印書版零片考

陳　正宏

目次

はじめに……二
第一節　版木の形態……二
第二節　和刻本『芥舟学画編』……四
第三節　版木と套印本『芥舟学画編』……九
第四節　『芥舟学画編』版木の意義……一三
附記……一五
注……一六

はじめに

二〇〇八年五月、京都に赴いた折、稿者は寺町のとある書肆で和刻本漢籍の版木を三枚購入する機会を得た。そのうち二枚は表面が墨、裏面が朱で刷られた痕跡があるものであった。早速東京に持ち帰った後、関連資料に当り、この版木と比較したところ、明治十二年（一八七九）敦賀・九如堂刻朱墨套印（二色刷り）本『芥舟学画編』（図版一）の版木であることが判明した。更に、考証を加えると、本版は、日本・中国の書誌学、美術史並びに印刷史に関わる貴重な意義が明かとなった。そこで、本論は、その底本の源流及び版木からうかがえる套印方法について検討したものである。専門家諸氏の御叱正を賜れば幸いである。

第一節　版木の形態

稿者が購入した『芥舟学画編』の版木は、いずれも表裏両面に刻されたものである。先ずは原本の排列に従って、各版木の大要を記す。

一、一号版木―首巻、日本人学者による序第五・六の二張（縦十六・五×横三十五×厚さ一・八五糎）

この二張は一枚の版木の両面に刻されており、表裏各一張、両面とも墨一色で刷られている（図版二）（図版三）。両面の版心上部には「序」、下部には張数「五」「六」をそれぞれ刻す。版心を境に半張ずつに分かれ、毎半張四行、毎行八～十一字内外不等、写刻体、無辺無界。第五張は印面高さ十四・二糎幅十八・五糎、第六張は印面高さ十四糎幅十八糎。また両面版心下部の張数部分には埋め木の痕跡があることに注意したい（後述）（図版四）。

二、二号版木―本文巻第一の第六張（縦十七・六×横三十四・七×厚さ一・七糎）

表面は全張縦十五・二糎横十九・四糎。版心と左右半葉の上下の匡郭とは線で繋がっておらず、魚尾も無い。故にこの面には、独立した二半張が刻されているように見える（図版五）。両半張の上部及び外側は空白で、文字は全て中央下部に刻されている。その文字部分は上下両層に分かれ、下層には『芥舟学画編』の本文を刻す。左半張六行、右半張五行、毎行十八字、無辺有界。上層は下層より狭く、注釈を刻す。左半張十二行、右半張十行、毎行五字の小字、単辺無界。字様は楷書で、全面墨印である。版心（幅一糎）は、中程に「芥舟学画編巻一」と刻すほか、下部には両半張を繋ぐ短い横線があり、その線を境に、上に張数「六」、下に書肆名「九如堂」を刻す（図版六）。

裏面の匡郭は「門」の字型を呈しており、全張縦十四・九糎横十九糎。前述の表面同様、版心の上下端と匡郭とは繋がっていない。版面の中央下部は空白、文字（評語）は小字の楷書で、全て左右両側と上部から為る「門」の字型の匡郭（半張十六行、毎行小字四字または三十四字、無界）内に刻されており、丁度表面と対応するようになっている。「門」の字型の匡郭外右下部には、巻数と張数を示す「一ノ六」を刻す。「門」の字型の部分及びその周辺は朱印

（図版七）。

三、三号版木―本文巻第二の第十四張（縦十七×横三十四・九×厚さ一・七糎）

表面は全張縦十五・一糎横十九・五糎。版心と左右両半張の版式字様は、上記二号版木の表面と同じだが、文字部分は両層に分かれておらず、『芥舟学画編』の本文のみを刻す。左半張六行、右半張七行、毎行十八字、単辺有界。全面墨印（図版八）。

裏面の匡郭は「門」の字型で、全張縦十五糎横十九糎。版心と版面の中央下部は空白、左右両側と上部には評語（半張十六行、毎行小字九字または三十四字、無界）あり。版式字様共に、上記二号版木の裏面に似る。「門」の字型の部分及びその周辺は朱印（図版九）。中央下部の空白には版下の残片が微かに看取され、その一部からは「九如」の二文字が辛うじてではあるが読み取れる点が興味深い（図版十）。

これら三枚の版木はいずれも横長型で、左右両端には版木本体の縦の長さよりも長い木の把手がある。上下には外側に突き出た枘が、一号版木と三号版木には各四つ、二号版木には三つ存する。

第二節　和刻本『芥舟学画編』

清・浙江湖州の人・沈宗騫の撰に係る『芥舟学画編』四巻は、乾隆四十六年（一七八一）、沈氏氷壺閣より初めて

刊行された。版木は後に「琴書閣」という書肆の手に移り、再三後印されることとなったが、版心には、なお「氷壺閣」の名を留めていた。江戸時代後期、この乾隆年間・氷壺閣刊・琴書閣後印本が日本に伝来し、弘化二年（一八四五）、初めてその翻刻本が出版された。本版には江戸時代後期の漢学者で号を「九方山人」と名乗った、相馬肇なる人物によって訓点と注釈とが施されているものの、[1] 実際のところ本文は琴書閣後印本『芥舟学画編』の覆刻である為、唐本すなわち琴書閣本と版式が寸法まで同じであるのみならず、字様もよく似ており、版心下部の「氷壺閣」及びその下の短い横線までもがそのまま刻出されている。この弘化本『芥舟学画編』は大いに流行し、明治に入ってからも印刷された。[2]

同時に、既に和刻本が出版されていたにも拘らず、唐本『芥舟学画編』も依然長崎を通じて日本に輸入されていた。[3] これが日本の知識人にどれほど持て囃されていたかについては、九州大学九州文化史研究所所蔵の長崎書賈の帳簿である『落札帳』内「弘化二年巳貳番割」の記載より、その一端をうかがい知ることができる。

芥舟学画編　壹部／包四本
四十三匁　鉄や
三十匁二分　安田や
十八匁　松のや[4]

これと『弘化二歳巳五月／辰四番五番六番七番船幷辰歳新渡（朱）／書籍元帳』第四十八号の記載とを比較すると、

非常に興味深いことが解る。

沈芥舟学画編　一部一套
拾壹匁　四拾三匁　鉄屋右一郎(5)

弘化二年、つまり和刻本の初印本が出版されたまさにその年に、入唐船が持ち帰った唐本『芥舟学画編』は原価十一匁だったのが、三種類の価格で日本人に売られ、最も高いところでは原価の四倍近くもの値が付けられていた、ということが知られるのである。

そうした機運の中、弘化本が出版される前年の弘化元年（一八四四）に、田結荘邦光という大阪の画家・学者が、『芥舟学画編』に惚れ込んで絶賛し、入手した唐本を用いて詳細な批評を書いた。その原稿は現在、大阪府立中之島図書館に保管されている。

大阪府立中之島図書館蔵・田結荘邦光評注・稿本『芥舟学画編』では、題簽と封面の書名の下に小字双行で「冒評傍訓」とある。「冒評」では、沈氏の原文について比較的掘り下げた解説及び評論が為されており、当然弘化年間刊「標書校正」本中の簡単な注釈よりも高度な出来になっている。天頭と行間には大量の評語がある。また巻末には「潯溪熊錦文原鐫」とあるが、これは田結荘が唐本を底本にしていたことの証明である。何故なら乾隆本の最終張にも「潯溪熊錦文鐫」と刻されているからである。

田結荘邦光（一八一五～一八九六）、原名は馝、字は必香。のち邦光と改名し、字を斉治、号を千里とする。大阪

府立中之島図書館蔵・稿本『芥舟学画編』の首巻に肖像画があるので、我々は今でもこの百年以上前の大阪の奇人の風采を目にすることができる。ここで敢えて奇人と称したのは、その経歴があまりに劇的だからである。田結荘邦光は幼少時より儒道と武道に親しみ、『芥舟学画編』の評点を著す前は富国強兵の志を抱いていた。しかし時に遇わず、暫く芸術の世界に遊び書物を著した。その後再び興味の矛先が変わり、今度は芸術研究に見切りをつけ、西洋砲術家に転身した。更に晩年には汽船を購入して自ら船長となり、海運業を始めている。より詳しい経歴については、田結荘邦光自撰の『履歴書』を参照されたい。(6)

稿本『芥舟学画編』の評注の内容は極めて興味深いものである。その内容を端的に言えば、中国の伝統絵画に対する口を極めた賛辞であり、江戸後期の絵画に対する辛辣な批判であり、更には、当時の世相が絵画を含む西洋文化に対して無知であったことへの蔑視であった。例えば、稿本巻第一第九葉の裏面と第十葉の表面の天頭には、以下の如き評語がある。

……海外異其性、殊其質者，烏可与我中国之教同其旨趣哉。且如西洋，其国自古莫所謂聖人者出焉矣。故其人物，愚痴冥頑，獣耳，魚耳。夫画固為一小技，而目視而不能筆以写，竟以鏡取之，照于玻璃盤，而后得写其形，不爾弗得爾也。故其画无大幅巨障，第片白片黒，千変一律，悪得謂之画？世之不識者，妄謂西洋写真而不偽，漢写偽而不真，是大非篤論也。彼悪能得写真，特鏡盤画也耳矣。

「我中国」という呼称はこの稿本中にしばしば見られ、しかも必ず改行して「抬頭」としている点は玩味に値する。

「鏡盤画」とは、当時日本で新たに流行していた西洋発祥の写実画法の一種である。

稿本『芥舟学画編』の内題の下には「山陰馬馝必香氏梓」とあるが、当時この書はまだ上梓されていなかった。田結荘邦光の評注本『芥舟学画編』を出版したのは、明治十一年（一八七八）に滋賀から京都に出て本屋の支店を開いたばかりの、佐々木慶助という人物であった。[7] 長きに亘り流行していた弘化本に対抗する為であろう、本稿を刊行するに当り佐々木慶助は二つの策を講じた。一つは、字様を弘化本の本文に似せ、且つ弘化本にある相馬肇の注釈を全て入れたこと、[8] もう一つは、套印によって朱色で田結荘邦光の評語を加えたことである。

ところが、佐々木慶助は生前の田結荘邦光と親交が無かったらしく、初印の套印本『芥舟学画編』の中で、田結荘邦光の字「斉治」は殆ど全て「斎治」と誤刻されている。[9] そして年月を経て本版を再印する段になって漸く、埋め木によって訂正したと思われる。[10]

また興味深いのは、田結庄邦光が稿本を著した弘化元年（一八四四）から、佐々木慶助が正式に書籍として刊行する明治十二年（一八七九）までの間はわずか三十五年。その間に、田結荘邦光の評語は稿本の原形から大幅に減らされて美しい套印本に刻されたという点である。それによって、前述の中国及びその絵画に対する賛辞と江戸後期の絵画に対する批判などは、殆ど影を潜めた。これは、明治維新後の日本の学界及び出版界に於いて、中国と西洋の絵画に対する価値判断に大きな変化が生じたことを示すものであろう。まさに中国の古語に言うところの「三十年河東、三十年河西」である。

第三節　版木と套印本『芥舟学画編』

現在知られている『芥舟学画編』の和刻本の版種は、前述の弘化本と明治本の二種類である。そのうち弘化刊本については、稿者も初印本と後印本を各一部所蔵するが、いずれも墨刷本で、版式も『芥舟学画編』の版木とは異なる。明治刊本については、西川寧・長澤規矩也両氏編『和刻本書画集成』第五輯に影印があり、それにより明治本は朱墨套印本で、版式もこの版木と実によく似ているということが判明した。東京大学総合図書館、国立国会図書館、大阪府立中之島図書館等に所蔵されているが、いま、東京大学図書館蔵本（以下「東大本」とする）に基づき、『和刻本書画集成』所載の影印も参照しながら、本版の概要について記す。

東大本『芥舟学画編』は一函四冊、青洲文庫の旧蔵書である。表紙は茶色、康熙綴、縦十九・七糎横十二・七糎。毎冊題簽には「頭書標注　芥舟学画編　田結庄斎治編輯」と題し、その下方には冊数を刻す。封面は墨印、二重枠を縦に三分して右から「田結庄斎治評／芥舟学画編／九如堂蔵板」と刻す。首巻には弘化元年（一八四四）田結庄邦光撰の自序（末尾に「千里学人」の署名あり。本文墨印、匡郭と界線は朱印）、「附言」（凡例）十条（墨印）、『芥舟学画編』原作者沈宗騫の伝記資料（墨印）、乾隆四十六年沈宗騫「自序」（両層。外側の匡郭及び下層の本文と界線は墨印、上層の内側の匡郭と評語は朱印）、本書目録（墨印）がこの順に排列され、その後に四巻の本文が続く（朱墨套印）。

本文部分は四周双辺、概ね上下両層。下層は沈宗騫撰の本文で、毎半葉八行十八字、墨印。上層は田結荘邦光の評語と相馬肇の注釈で、注釈と評語の間は黒線で仕切られているが、共に毎半葉十六行。注釈は毎行五字の小字で墨印、評語は少ない所で四字、多い所で三十四字の小字で、朱印。評語の字数に多少の別があり且つこれほど差がある理由は、東大本の表紙に題された「頭書標注」の中の「頭書」の二文字と関係がある。

周知の通り「頭書」とは、「首書」「鼇頭」とも言われる日本漢籍特有の注釈形式である。[11] この形式で刊行された漢籍の中には、中国古籍の二階本或いは三階本に類似の、本文が下層に、注釈と批語が中層又は上層に配置されているものもあるが、それより多いのが日本独自の「門」の字型をした「頭書」である。明治刊本『芥舟学画編』の本文に於いて「頭書」部分は主に朱で印刷されている為、この特徴はより際立っている。

東大本『芥舟学画編』の本文巻第一の第六張と巻第二の第十四張の二張にも、当然朱印の「頭書」がある。東大本と前述の二号三号版木とを比較すると、字様が極めてよく似ていて朱墨の配色も同じであるというだけでなく、更に以下のような二組のデータが得られた。

正文巻一第六張（単位：糎）

	表面匡郭縦	表面匡郭横	裏面匡郭縦	裏面匡郭横
東大本	前半葉右 十五・四	前半葉上 九・一	前半葉右 十五	前半葉上 八・八五
	後半葉左 十五・三	後半葉上 九・一	後半葉左 十五	後半葉上 八・八
二号版木	左半葉左 十五・三	左半葉上 九・二	左半葉左 十四・九	左半葉上 九
	右半葉右 十五・二	右半葉上 九・一五	右半葉右 十四・九	右半葉上 八・九

正文巻二第十四張（単位：糎）

	表面匡郭縦	表面匡郭横	表面匡郭縦	裏面匡郭横
東大本	前半葉右 十五・二 後半葉左 十五・一五	前半葉上 九・一 後半葉上 九・〇五	前半葉右 十四・九 後半葉左 十四・八	前半葉上 八・八 後半葉上 八・七
三号版木	左半葉左 十五・二 右半葉右 十五・一	左半葉上 九・二 右半葉上 九・二	左半葉左 十四・九 右半葉右 十四・八	左半葉上 九 右半葉上 八・九

この表を見ると、東大本と二枚の版木の匡郭の寸法は〇・二糎と違っていないことがわかる。版木が少なくとも二度の印刷を経ていること、明治十二年の刻版から既に百三十年近く経過していることを加味してなお、両者の寸法がこれだけ近い値であるということが意味するところは、言うまでもなく明らかであろう。

ところで、東大本首巻の千里学人（田結庄邦光）序の第五・六張は、一号版木の表裏に相当するが、両者の丁付は逆になっている。つまり東大本の第五張に相当するのが一号版木裏面に刻された第六張であり、東大本の第六張に相当するのが一号版木表面に刻された第五張であるということになる。また版木を仔細に見ると、その版心の丁数部分には埋め木の跡が認められる（図版三）。更に『和刻本書画集成』に影印された後印本の該当箇所と文章の内容とに鑑みると、東大本に於いて当該二張の丁数は逆に誤刻されていたが、後印本に至って正しく改刻された、ということが知られる。(12)

東大本の最後には墨印の奥付があり、前半葉は縦に二分して右から次のように刻す。

明治十二年四月三十日板權免許
同年十二月出版

編輯人　大阪府士族／田結庄斎治／大阪府下東成郡二番天王寺村／福井辰方同居
出版人　滋賀県平民／佐佐木慶助／越前国敦賀郡敦賀港旭町／二番地

後半葉は、上半分の中央に大字で「発売所」とあり、下半分には右から次のように刻す。

西京／佐佐木慶助支店／富小路通三条上ル町
仝／藤井孫兵衛／御幸町通御池下ル町

また、この奥付の後半葉の枠外左下部には耳格に似た縦長の枠があり、中に「同／三西／版木師藤本清治郎」と題す。

以上のことを総合すると、稿者が京都で購入した『芥舟学画編』の版木は、明治十二年敦賀佐々木慶助九如堂刊・朱墨套印本の版木に[13]、後から部分的挖改が施されたものであると断定できる。そしてその刻工は、当時京都在住の藤本清治郎という人物であった[14]。

第四節　『芥舟学画編』版木の意義

以上、明治十二年刊・朱墨套印本『芥舟学画編』の版本とその三枚の現存する版木の相関からうかがえる最大の意義は、これらに朱墨套印法の実態が現れているという点にある。

そこで先ず注目したいのが、三号版木の裏面である。前述の通り、この版木の中央下部は空白部分で、そこには版下が僅かに残っている（図版九）。浮世絵の製作法をも勘案すると、これは同一葉の版下を複製して裏面にも貼り附けた為であると推測できる。

また一号版木では、表裏に連続する二張の序文が刻されており、且つ両面の文字の向きが同じであることに注意したい。これは印刷工が一葉を刷り終えて次の一葉を刷る時、版木を左右いずれかの方向から持ち上げて、上下の向きを変えずに裏返していたことを示す。序文は文字が墨、匡郭と界線が朱という朱墨套印だが、ここで興味深いのが、朱印の匡郭及び界線の寸法と欠損の切れが、全葉に於いて完全に一致しているという点である。[15] これにより明治刊本『芥舟学画編』第一篇序の朱墨套印は、先に匡郭と界線を印刷し、次に文字を印刷する方法、つまり清乾隆年間『武英殿聚珍版書』と類似の方法によって行われたことがわかる。[16] 序文を印刷するに当たっては、続く本文と混同しないよう、敢えて版木上の文字を全て同方向に刻したのであろう。

更に二号・三号版木にも注目したい。これらでは表裏の文字は逆向きに刻されており、両面を印刷することで一葉

が完成する仕組みになっている。このことからは、印刷工が片面を墨で印刷した後、もう片面を朱で印刷する際、版木を上下いずれかの方向から持ち上げて、上下の向きが逆になるように裏返していたことが知られる。

以上のことに基づいて、明治時代に伝えられていた東アジアの伝統的な套版印刷法（文字文献）は、凡そ下記の如くであったと推測される。

1．文字が墨、匡郭と界線が朱の場合は、基本的に、匡郭と界線の部分はまとめて印刷する。とすれば朱で刷る版木は一枚で済む。

2．上下両層或いは更に複雑な版式の場合、墨印部分と朱印部分は別々の版木に刻す。この時同一葉ならば同一版木の表裏に、両面の文字の向きを逆にして刻すのが望ましい。

3．同色で同書中の別の葉を印刷する時は、原則、同一版木を上下の向きを変えずに裏返すか、別の版木と平行に入れ替える。[17]

4．同一葉に二色目を重ねて印刷する時、原則として二色目の版木は一色目の版木の裏に刻しておき、印刷工はその版木を上下の向きが逆になるように裏返して刷る。また明治刊套印本『芥舟学画編』では、朱と墨が重なり滲んでいる現象が見られないことから、套印の際は墨印面を一枚刷り終える度毎に版木を裏返して朱印面を刷ったのではなく、墨印面だけを続けて印刷した後、版木を上下逆になるように裏返して朱印面を印刷したのだと推測できる。効率面を考慮すれば、朱墨は相向き合う二人の印刷工によって分業制で印刷されていた可能性もある。

これは、迅速で且つ間違いの起こりにくい最善の套印法である。従って理論的にも上記の推測は成り立つと言

えよう。

日中両国（特に中国）に於いて現存する十九世紀或いはそれ以前の套印本はけして少なくはない。しかしこれまで文字のみの套印本の版木に関する学術的報告がなされたことは、無かったのではないだろうか。今回、稿者は京都で入手した套印本『芥舟学画編』の版木を研究材料の中心として、その清・乾隆時代の原版から日本・江戸時代・明治時代の諸伝本に至るまでの道筋を辿ったが、こうした研究法は、十九世紀後期、中国の漢籍が日本に伝播していく過程をより具体的に明らかにしていく上でも有効であろう。また今回のように極めて特殊な文物を用いて、伝統的套印法を細部に至るまで検討することは、書物文化についての理解を深めるうえで、大変有意義であるのみならず、東アジア書誌学や美術史、印刷史等、他の多方面の学術研究にとっても裨益するところ大なるものがあると言えるであろう。

附　記

本稿の起稿及び修正に際しては、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の大沼晴暉教授・高橋智准教授、並びに中国広州美術学院の邵宏教授より貴重な御教示を賜った。また本稿の内容については、京都大学の金文京教授の御好意により、「套印の意義再考―二色刷『芥舟学画編』の版木について」と題して、二〇〇八年十月六日、京都大学人文科学

研究所で発表した。また最後に、日本語訳については、鳥海奈都子氏の協力を得た。ここに諸先生方に篤く御礼申し上げます。

〔注〕

（1）弘化刊初印本『芥舟学画編』の封面左枠上方には「日本弘化甲辰翻刻／九方先生標書校正」朱長方印影があり、末巻には「弘化乙巳秋九月書于浪華宿居」の跋、落款には「九方山人平肇」の署名あり。市古貞次等編『国書人名辞典』第三巻（岩波書店、一九九六）によれば、江戸後期の漢学者相馬肇、字元基、号九方、享和元年（一八〇一）生、明治十二年（一八七九）三月二十八日没、讃岐人、岸和田藩校教授、編著に『清書画名人小伝』がある。これにより弘化本『芥舟学画編』の注釈者は江戸時代の儒者・相馬肇であることが知られる。平肇とは、「平氏」を称したことによる。

（2）長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録』（増補補正版、汲古書院、二〇〇六年）子部芸術類には、『芥舟学画編』弘化刊本の後印本四種を著録する。うち二種は明治より前の印本で、あとの二種は明治期の印本である。（一二二～一二三頁）

（3）大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七年）の「資料編」には、本文中に引用した『落札帳』と『弘化二歳巳五月／辰四番五番六番七番船幷辰歳新渡（朱）／書籍元帳』以外の資料も収録されており、『弘化四歳未八月／午四番船／同五番船／同六番船／同七番船／未一番船／書籍元帳』「午六番船」には「沈芥舟学画編　一部一包／拾匁　写本」（五一四頁）、『嘉永二年酉歳十月／酉二番船／同三番船

／同四番船／書籍元帳』「西四番船」には「学画編　二部各一包」「弐拾目／拾匁」（五四一頁）、『嘉永三年戊五月／西五番船／同六番船／同七番船／天草難船／書籍元帳』には「芥舟学画編　一部一包／六匁弐分」（五四九頁）との記載がある。以上三種の原本は長崎県立長崎図書館に所蔵あり。

（4）大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』六二四頁。

（5）大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』四七五頁。

（6）田結庄の経歴は、天坊幸彦氏「田結庄千里翁伝」（「ヒストリア」第十四号、一九五六年、六〇～七六頁）の第一章に引く田結庄邦光自撰『履歴書』及び他章関連箇所に拠る。また田結庄の稿本『芥舟学画編』も参照した。

（7）第三節に引用した東大本『芥舟学画編』の刊記参照。また井上隆明氏『改訂増補近世書林版元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）には佐々木九如堂について「明治十一年頃上京」との記載あり。（三三六～三三七頁）

（8）相馬肇の弘化本に載せる注釈を明治刊本にも刻入したことについて、佐々木慶助が何も説明していないのは、佐々木本が出版された同年の明治十二年三月に相馬肇が逝去していた為であろう。

（9）大阪府立中之島図書館「玄武洞文庫」所蔵の田結庄邦光の手稿では、署名は全て「斉治」となっており、「斎治」とするものは一点もない。（『大阪府立図書館特別集書目録　玄武洞文庫解題目録』、清文堂出版、一九七三年、三七～四一頁参照）。また名と字の組合せを考えても、「斉治」は「休斉治平」という古訓に由来し、「邦光」とも通じる。一方「斎治」では説明がつかない。

（10）『和刻本書画集成』（西川寧・長澤規矩也共編、第五輯、汲古書院、一九七六年）所載の明治刊後印本『芥舟学画編』の影印本を見ると、封面と奥付で元々誤刻されていた「斎」の字は全て「斉」に改められている。また後

印本の匡郭等の切れが目立つことから、初印からある程度年月が経過していたことが証される。

(11) 鼇頭本の変遷については、高山節也氏「和刻本漢籍鼇頭本について」(「日本漢文学研究」第三号、二松学舎大学二十一世紀COEプログラム)を参照されたい。

(12) 大阪府立中之島図書館蔵本にも東大本と同様の誤りがある。

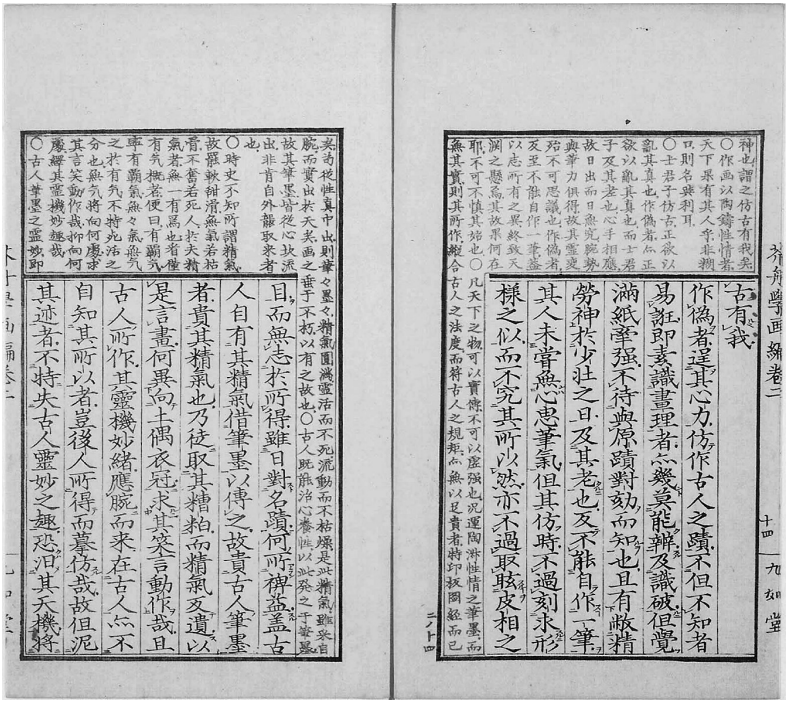
(13) 『改訂版京都古書店巡り』(京都府古書籍商業協同組合、二〇〇〇年、九七頁)に拠ると、佐々木九如堂はその当時はまだ現在の京都丸太町通寺町付近で営業していたようだ。二〇〇八年十月、稿者がその付近の古書店で尋ねたところ、佐々木九如堂は数年前に閉店したと告げられた。

(14) 藤本清治郎の詳しい生い立ちについては目下知る術が無い。丸山季夫『国学者雑考』(吉川弘文館、一九八二年)所載『刻師名寄』に藤本氏の名は見えるが、典拠は明治十二年刻『芥舟学画編』を記すに留まる。(一四〇頁)

(15) 『和刻本書画集成』第五輯に影印されている後印本を見れば明らかである。またここで特に、序文部分の匡郭は後印本では四周単辺であるのに対し、初印本では四周双辺であることを指摘しておきたい。両者の違いは、後印時版木が既に磨損していた或いは失われていた等の理由で、版木を新たに刻した為に生じたものと推測される。

(16) 当然ながら明治刊本『芥舟学画編』の朱印の界線と墨印の文字との間の空間は広めにとられている。朱墨どちらが先に刷られたかについては、今後の研究成果を俟ちたい。

(17) 本文の墨印部分もまた、この方法で印刷されたものと考えられる。



図版一

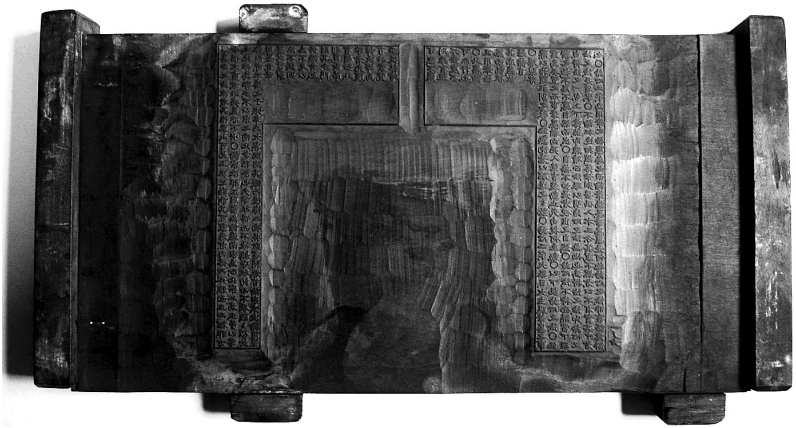
図版二

図版三

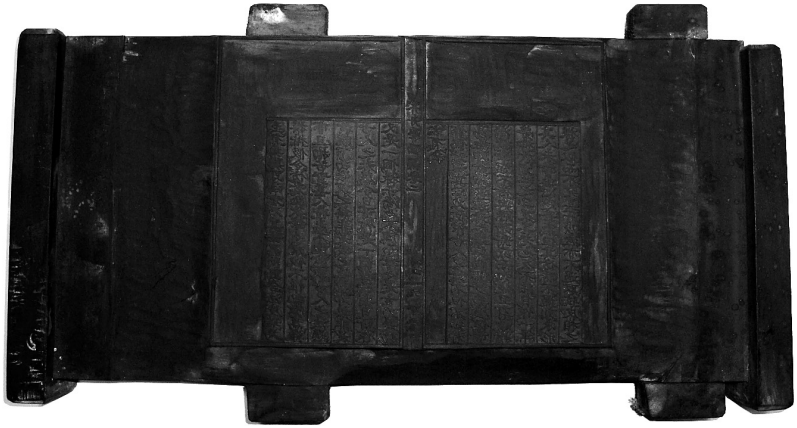
図版四

図版五

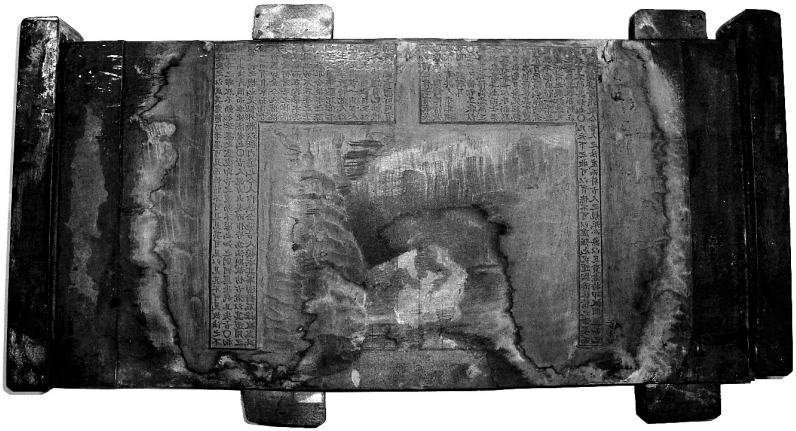
図版六



図版七



図版八



図版九

図版十